

〔講義〕 相談支援員の役割と個別支援の基本

～地域で暮らす「一人」を大切に、
「一人」が大切にされる地域づくりを目指すソーシャルワークの理解～

同志社大学 社会学部

社会福祉学科 空閑 浩人（くがひろと）

はじめに ～それでも桜は咲く・・・～

(1) 「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」（同志社大学創立者・新島襄（1843-1890）の言葉）

* ソーシャルワークや個別支援とは、目の前の「一人」を大切に作る営みであり、その地域で暮らす「一人」が大切にされるための営み

(2) 時代が、私たち相談支援員の役割を、ソーシャルワークを求めている

* 言わば「密接」や「濃厚接触」を大切にしてきた個別支援やソーシャルワーク

* これまで通りには出来ない、限られた条件や機会のなかで、私達はいかに創意工夫を重ねるか、アンテナを張るか、感性を研ぎ澄ますか？

* 感染リスクへの対応は大切、しかしそれと引き換えに私たちが手放してはいけないことは何か？

* 人がそれでも生きていく、生きて暮らす場所、生活が支えられる場所、一人ひとりの存在とその尊厳が守られる場づくり、人が生きて生活していける場づくり、暮らしの場づくり、居場所づくりとしての社会福祉、個別支援、ソーシャルワークの営みの必要性和大切さは変わらないし、むしろ昨今の社会的状況のなかで、より高まっていると言えるのではないか？

(3) 私たち相談支援員一人ひとりが、当事者や家族、地域の大切な「資源」となる

資源のなかでもっとも重要なものは、いうまでもなく、人間自身の創意、想像力と知力である。

(E.F.シューマッハー/酒井懋訳(2000)『スモールイズビューティフル再論』講談社学術文庫、96 頁)

* 私たち相談支援員の「創意工夫する力」「想像力と創造力」「知力と思考・考察力」が資源となる

1. 人が生きること、生きて存在することの尊さ（人間の尊厳）を忘れない

* 人が「居る」「生きる」「暮らす」「生活する」ということにかかわるソーシャルワークは、「その人が生きてそこに居ること」そのものの尊さ、尊厳、かけがえのなさを手放してはいけない

* 漫画『健康で文化的な最低限度の生活』から・・・『健康で文化的な最低限度の生活』は、柏木ハルコによる漫画。『ビッグコミックスピリッツ』（小学館）にて、2014 年から連載中。新人ケースワーカーの目を通して、生活保護のリアルに迫る物語。

【「あれから、あの面談の意味をずっと考えている。私に対して怒りの表情を見せた阿久沢さんが、何故半田さんの説得には乗ったのか」（by 義経えみる）】

半田さん「どんな温厚な人でも尊厳を侵されれば怒ります」

義経えみる「尊厳・・・ですか・・・」

半田さん「仕事を失う、病気になる、お金がなくなる、そういったことで人の人生の選択肢はどんどん少なくなります。でもどんなに選択肢が少なくなっても、時には全く選択肢がないような状況でも、その人の生き方を最終的に決めるのは本人です・・・基本的にはね。本人の意向を無視して、こちらの都合で無理矢理動かそうとすれば人は当然怒ります。どんな人にもその人なりの「都合」があります。人は自分の「都合」でしか動きません。その「都合」を知るにはまず相手にしゃべってもらわないと・・・そのためにはこっちにも「聞く準備がある」と示す必要がありますね

（柏木ハルコ『健康で文化的な最低限度の生活』第 2 巻「第 10 話それぞれの」より）

2. 人が「生きて、生活する」とは何か？人の「幸せ」とは何か？

(1) 人が「生きる」とは何か？～個別支援活動やソーシャルワークの根底にある考え方～

*男女の高校生の物語『君の臍臓をたべたい』（「キミスイ」！？）から

『君の臍臓をたべたい』は、小説家住野よるによる男女の高校生を主人公とする青春ストーリー。2015年に住野よる初の単行本として公刊された。男子高校生（「僕」）が病院で、「共病文庫」というタイトルの日記を偶然拾う。それはクラスメイトである女子高校生（山内桜良）の秘密の日記帳であり、彼女が臍臓の病気により、余命がもう長くはないことが記されていた。それから「僕」は、山内桜良の「死ぬ前にやりたいこと」に付き合わされることになる。まったく正反対の性格の二人が、次第に心を通わせていきながら、お互いを思い、成長していく物語が描かれている。

「きつと誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きるって呼ぶんだよ」（中略）

「誰かを認める、誰かを好きになる、誰かを嫌いになる、誰かと一緒にいて楽しい、誰かと一緒にいたら鬱陶しい、誰かと手を繋ぐ、誰かとハグをする、誰かとすれ違う、それが、生きる。自分たった一人じゃ、自分があるって分からない。誰かを好きなのに誰かを嫌いな私、誰かと一緒にいて楽しいのに誰かと一緒にいて鬱陶しいと思う私、そういう人と私の関係が、他の人じゃない、私が生きてるってことだと思う。私の心があるのは、皆がいるから、私の体があるのは、皆が触ってくれるから。そうして形成された私は、今、生きてる。まだ、ここに生きてる。だから人が生きてることには意味があるんだよ」（住野よる（2015）『君の臍臓をたべたい』双葉社、192-193頁）

*「生きる」とは誰かと出会うこと、つながること、「誰かにとっての私」である続けること

*個別支援やソーシャルワークの実践は、誰かやどこかとの出会いや関係、つながりを通して、その人の「生きる」を支える営み

(2) 人の「幸せ」とは何か？（住野よる第2作！より）

『また同じ夢を見ていた』は、友達のいないひとりの少女が、リストカットを繰り返す女子高生、アバズレと罵られる女性、一人静かに余生をおくる老女・・・との出会いを通して、「幸せとは何か、どこにあるのか？」を考える物語。

「幸せとは何か」 私が正面の空に体を吸い込まれてしまいそうだなと思っていたら、南さんが突然言いました。（中略）南さんは、もったいぶったように私の目をじっと、前髪の奥の目で見て、それからやっぱり大事なことは私の方は見ず、ただ前の空を見ながら、ぼつりと床におくように言いました。「自分がここにいていいって、認めてもらえることだ」

（住野よる（2016）『また、同じ夢を見ていた』双葉社、84-85頁）

*個別支援やソーシャルワークの実践は、その人が「自分はここにいていい」「ここにいたい」と思える関係や場所（その人にとっての「居場所」）をつくること

(3) 人が生きるために必要な「居場所」といえる関係や場所

*薬物依存症とは「孤立の病」である

つまり、人が薬物に手を出すのもまた、多くの場合、「つながり」を得るためなのです。（中略）そして忘れてはならないのは、違法な薬物を使ってでも人とつながりたいと願う人は、それほどまでに強く、「自分にはどこにも居場所がない」「誰からも必要とされていない」という痛みを伴う感覚に苛まれ、あるいは、人との「つながり」から孤立している可能性がある、ということです。（18-19頁）

私がかねてより、薬物依存症とは「孤立の病」であると考えてきました。つまり、孤立している人が「つながり」を求めた結果、かえって孤立を深めてしまうという、実に皮肉な病気です。（20頁）

（松本俊彦（2018）『薬物依存症』ちくま新書）

*薬物を使わなくても、「ひとりじゃないと思える、自分が大切にされる、必要とされる、自分が活かされる、人とのつながりや関係や場所」の経験があること

*求められるのは「社会関係の再構築」を助ける支援

WHO（世界保健機関）が、ゲーム依存を専門治療の対象となる疾患と認定する。素人は説教や恫喝で治ると思いがちだが、それは効果がないようだ。力づくで従わせようとしても、逆上するか、嘘をつき隠れてゲームを続けてしまう。依存を脱するには、当人がその気になるのが必要だ。だがそれ以上に重要なのは、当人の社会関係を改善することだ。麻薬もそうだが、依存症は現実生活でトラブルを抱えている場合におきやすい。ゲームの方が現実より充実しているという状態では、脱依存は難しい。つまり依存症とは、社会関係の歪みから生じる病なのだ。関係の歪みから依存になると、関係がますます歪み、さらに依存が深まる。強制して一時的にやめさせても、当人の社会関係が変わらないとすぐ依存が再発する。周囲の人がやるべきことは、説教や恫喝ではなく、社会関係の再構築を助けることだ。「論壇時評」by 小熊英二（『朝日新聞 2018年6月28日（木）』朝刊）

3. 個別支援における利用者（当事者・相談者）とのコミュニケーション

(1) 「誰かがちゃんと見てくれている」という安心感のなかで人は育つ・支えられる

「ママがスマホばかりみてるから、ぼくはスマホになりたい。（中略）ママがみってくれないと、ぼくはいなくてもいいようなきもちになっちゃうよ。だいすきなママがキライになりそうなぼくがキライなんだ。だからママのスマホになりたいです」（のぶみ（2016）『ママのスマホになりたい』WAVE 出版）

- * 誰かが自分を見てくれている、見守ってくれている、その関係そのものが支えになる
- * 自分や相手を「傷つけたり、試さなくてもいい」関係を経験すること

自殺や自傷を繰り返したり、非行や薬物から抜けられなかった人が、その泥沼から脱することができたとき、しばしば口にするのは、見捨てることなく、変わらずに見守っていてくれたことへの感謝の言葉である。（中略）それをしっかりと確かめることができさえすれば、大きな安心感が次第に蘇り、もう自分や相手を傷つけたり、試す必要もなくなっていく。（241 頁）

（岡田尊司（2016）『生きるための哲学』河出書房新社、241 頁）

(2) 自尊感情、自己肯定感は他者のメッセージによって育まれる

「私は私である」という自己同一性を支えているこの自己肯定の力はどこからやってくるのだろうか。それもまた、誰の目にも耳にもふれない透明な「私」自身がつくりだすのだろうか。そうではないと言いたい。その力は、「あなたがあなたであることはよいことだ」という他者のメッセージからやってくる。しかも、その「よい」には理由はない。ただ「あなた」がいるということがそれだけでよいことなのである。（藤谷秀（2001）『あなたが「いる」ことの重み』青木書店、12 頁）

- * 私の存在が「無条件に肯定」される「社会的」なつながりや場所、社会関係があるということ

(3) その人に向けられる「言葉」も、その人を取り巻く大切な「環境」である

【「ありのままの自分」に価値があると子どもたちが気づける「関係」や「言葉」を提供したい】

彼らはみな、加害者になる前に、被害者であったような子たちなんです。極度の貧困のなか、親に育児放棄や虐待をされてきた子。発達障害を抱えているために、学校でひどいじめを受けてきた子。きびしすぎる親から、拷問のようなしつけをされてきた子。親の過度の期待を一身に受けて、がんばりすぎて心が壊れてしまった子。心に深い傷を持たない子は、一人もいません。その傷を癒やせなかった子たちが、事件を起こして、ここに来ているんです。（「はじめに」より）

気の強い乱暴者だけが、犯罪者になるわけではありません。むしろ、気の弱い、自分を出すことのできない、おとなしい子の方が、少年刑務所にはずっと多いのです。そんな子は、「自己肯定感」が低いのが常。（中略）大切なのは「ありのままの自分に価値があるんだ」と気づくことです。（27 頁）

（寮美千子編（2016）『世界はもっと美しくなる 奈良少年刑務所詩集』ロクリン社）

.....

言葉	「いいんだよ」「がんばったね」「よくやった」
	この言葉が ほしい この言葉が ボクを幸せにする
	「お前はアカン」「でき悪い」「お前はいらぬ」
	この言葉は いらぬ この言葉は ボクを不幸にする
	嫌な言葉を言われると 自信をなくし 自分自身が嫌になる
	好きな言葉を言われたくて 行動し ボクは ボクを見失う
	一つ一つの言葉がボクを造る 一つ一つの言葉が ボクを壊す (46-47 頁)

- * 私たち支援者は、その人（当事者や家族）にどのような「言葉」をかけることが大切なのか
- * 私たちはどのような「言葉」で、その人に伝える、見守る、支えることが大切なのか
- * その人が、どのような「言葉」をかけられ、どのような「言葉」に包まれながら、地域で生きていくことを私たちは願うのか
- * あらためて、個別支援での様々なコミュニケーション場面における「言葉」の大切さを考えたい

4. 「支援する」とは何か？「支援者」は何をするのか？

(1) 「伴走者」としての支援者（なぜ「伴走」なのか？）

- * その人の生活はその人のもの、その人の生活や人生の主人公はその人である
- * 「誰かの人生や生活を代わりに生きることはできない」という絶対的な事実の前に、私たち支援者は「謙虚」でありたい（本人から学ぶ、教えてもらうことの大切さ）
- * 「支援」という名のもとに、支援者がその人の生活や人生を奪うことになってはいけない。支援することは、その人やその人の生活を管理することではない

【伴走者としての支援】 私は支援者の役割をイメージするとき、長距離ランナーの伴走者を思い浮かべます。伴走者である支援者は、相談者であるランナーの斜め後ろあたりで、時折声をかけ、励まし、サポートすることを伴走の基本スタイルとします。時には、ランナーの隣で同じ速度で走るときもあれば、少し前に出てランナーを先導しながら走るときもあります。ランナーの状況に応じて伴走スタイルは変わります。(173 頁)

【相談者自身が幸せになりたいと思える支援を】 相談者の方がいて、支援する私たちがいる。支援は一方的に提供されるものでも、提供するものでもなく、双方の共鳴や共感や協力体制があり成り立っていくものだと、相談者の方と協働して問題にむきあうなかで気付かせてもらったことでもあります。(中略) 「力になりたいという想い、自体はとても大切ですが、忘れてならないのは、問題を解決する主体者は相談者自身であるということです。相談者の方の「問題に向き合う気持ちと、本来持っておられる問題解決する力」を引き出し、盛り立てていくことが私たちの役割でもあります。言うまでもなく、私たちは相談者の方々の人生を代わりに生きることはできません。「相談者を幸せにしてあげる支援」ではなく、「相談者自身が幸せになりたいと思える支援」が、私たちに求められているのではないのでしょうか。(176 頁)

(高橋亜美ほか (2015) 『子どもの未来をあきらめない—施設で育った子どもの支援—』明石書店)

(2) 個別支援におけるソーシャルワークの視点（個人と環境への視点）の大切さ

ひとは、ひととひととの関係の中で生きる。ひとと対話をしながら生きる。どれだけ孤立していたとしても、どれだけ孤独と思ったとしても、常に何かとの関係の中に生きる。何かに影響をされ何かに影響している。よって、ひとが精神を病むときはいつも、それはひととひとの関係性の中で起こるという考え方がある。(中略) ひとがとりまく環境とうまく対話ができなくなったときに、ひとは病む。(森川すいめい (2016) 『その島のひとたちは、ひとの話をきかない—精神科医、「自殺希少地域」を行く—』青土社、180 頁)

- * 人は自分を取り巻く環境（人や場所）と「対話」しながら暮らしている

- * 人の「こころ」は勝手に病まない!?(その背景には社会的な出来事や経験がある) * 課題や困難状況を「人と環境との適合の不具合」「環境との対話が上手くいっていない状態」と捉える→「犯人さがし」「悪者さがし」には意味がない?
- * 「なにがそうさせているのか?」「そうせざるを得ない状況は何か?」「そのような行動に至る背景には何があるのか?」「(いま、ここで)(その相互関係のなかで)何が起きているのか?」をみること
- * そして、「その人を支える」とともに、その人が生きやすい「環境づくり」「環境改善」「関係づくり」「関係性の再構築」「地域づくり」をする
- * 「人を変える」ことは難しい。でもその人への「かかわり方(支援の仕方、声のかけ方・・・)」やその人がいる「環境(家族関係、家庭環境、住まい、地域、学校、支援者やサービスとの関係・・・)」のあり方は変える、工夫することができる?
- * 人を「変える」のではなく、人が「変わる」「変われる」「変わろうとする」ことを支援する

(3) そのために、支援者の側からだけでなく、「当事者の側から」「本人の側から」「家族の側から」の視点でみること(「本人や家族がいるところ」発の支援の過程)

- * 支援者の側からみたときとは異なる見え方がある。言わばもう一つの「当事者の物語」「本人の物語」「家族の物語」が紡がれる(人は皆、「独自の現実」を体験している)
- * たとえば「わがまま(?)」や「無理難題(?)」とされるような当事者の訴えや要求(デマンド)であっても、まずはそれらを受け止めて、その背景にある「ニーズ」を「かかわりや関係性」の視点から社会的に捉える(ソーシャル・ニーズ!)こと
- * 見ようとしなければ見えない姿が、聞こうとしなければ聞こえない声がある

(4) その人の「小さな世界(独自の世界)」を知っている(知ろうとし続ける)こと

【「私の小さな世界を知ってくれている」人の存在が支えになる】

すべての人が皆自分だけの世界を持ち、その世界の中で必死に生きている。役割を持ち、何かしらの責任を負い、自分というたった一つの命を今日から明日へと日々運んでいく。(中略)そしてすべての人が、そんな自分だけの「世界」をもがきながら生きている。その姿を近くで誰かに見てもらえる心強さや安心感を知っている。「見ている」「私のこの小さな世界を知ってくれている」「大丈夫?と気にかけてくれる人がいる」ということがどれほど大きな支えなのかを知っている。そして誰もがかけがえのない大切な人がもがく姿を見た時、「この人の大丈夫に、自分になりたい」と願っている。(RADWINPS 野田洋次郎「解説」新海誠『小説 天気の子』角川文庫 2019年、308-309頁)

- * その人が「もがく」姿を「大丈夫、ちゃんと見ているよ」という相談支援員でありたい
- * 私たち相談支援員の存在が、当事者の、利用者の、地域の人々の「大丈夫」でありたい
- * 個別支援・ソーシャルワークを担う事業所や施設の存在が、地域の「大丈夫」でありたい

おわりに

- (1) 「それでも生きていく」ことにかかわり、寄り添うソーシャルワーク(漫画『鬼滅の刃』から)

『鬼滅の刃』は、吾峠呼世晴による漫画。『週刊少年ジャンプ』(集英社)にて2016年11号から2020年24号まで連載された。大正時代を舞台に、主人公(竈門炭治郎)が家族を殺した「鬼」と呼ばれる敵と戦いながら、鬼と化した妹(竈門禰豆子)を人間に戻す方法を探す物語。

失っても 失っても 生きていくしかないです

どんなに打ちのめされようと

by 竈門炭治郎（吾峠呼世晴『鬼滅の刃』第2巻、第13話「お前が」より）

鬼は人間だったんだから 俺と同じ人間だったんだから

足をどけてください 見にくい化け物なんかじゃない

鬼は虚しい生き物だ 悲しい生き物だ

by 竈門炭治郎（吾峠呼世晴『鬼滅の刃』第5巻、第43話「地獄へ」より）

* 「人」にはそれぞれに事情がある。人にはそれぞれに過去がある。

(2) ソーシャルワークの実践とは、当事者、利用者、家族、地域の人々とともに、その出会いやつながりのなかで、たくさんの「大切」を見つけて、そして新しい「大切」を増やしていくこと～

どんな未来が こちらを覗いているかな

君の強さと僕の弱さをわけ合えば どんな凄いいことが起きるかな

ほら もうこんなに幸せ

いつかはひとり いつかはふたり いや もっと もっと 大切を増やしていこう

ハルノヒ（2019年4月） 歌、作詞、作曲 あいみょん

（「ハルノヒ」は、アニメ映画『クレヨンしんちゃん 新婚旅行ハリケーン～失われたひろし～』（2019年4月公開）の主題歌。主人公野原しんのすけの両親であるひろしとみさえをテーマに、歌詞はひろしの視点から書かれている。）

* 支援とは「支援する側」から「支援される側」への一方的な営みではない

* 支援者とは強い人のことでは決してないし、強くなくていい？強くない方がいいときもある？

* そして、当事者や利用者がいつも弱いとは限らない？そして弱くてもいい？

* その弱さを、弱さとして、「語れる・受け止めてもらえる関係や場所」があることの方が大切

* もっと言えば、一人一人が強いかや弱いかよりも、つながりやかかわりのなかで、それらを「どう分け合えるか」の方が大切だということ

* 強くても弱くても、そのこと以上に、私たちが「どうつながるか、つながれるか」「寄り添い、かかわり続けられるか」ということを大切にしたい

* そして、「分け合う」ことができれば、「凄いいこと！？」が起きる、たくさんの「大切」を見つけて、新しい「大切」を増やしていける

* コロナ禍にあって、いや、コロナ禍だからこそ、個別支援やソーシャルワークの活動、私たち相談支援員の役割とは、そんなことを大切にする思考や実践、営みでありたい

(3) どこかに「きっかけ」「突破口」「解決策」があることを信じて・・・「かかわり続ける」仕事

人生は一度しかない。たとえどんな理由で組織に振り回されようと、人生は一度しかない。

ふて腐れているだけ、時間の無駄だ。前を見よう。歩き出せ。

どこかに解決策はあるはずだ。それを信じて進め。それが、人生だ。

by 半沢直樹（池井戸潤『オレたち花のバブル組』文春文庫2010年、361頁）

* その人が「そこに生きて、生活すること」をあきらめない個別支援・ソーシャルワークでありたい

(4) この時代におけるソーシャルワーク・ソーシャルワーカーという「希望」

* ソーシャルワークがあること、ソーシャルワーカー（相談支援員）がいることは、地域の「希望」！

☆誰かのために、地域のために、本気（マジ）になる

☆人と社会、そして地域に、本気に、まっすぐに

☆ソーシャルワークで、（もう一度）前を向く!!!